

自宅の庭先で草花や野菜を育て、高齢者の心身の健康を促す訪問型の園芸療法が注目されている。病院や施設と違い、一人一人の体調や園芸への関心度に合わせてプログラムでき、高い効果も期待できそうだ。

訪問型の園芸療法に取り組んでいるのは三重県。お年寄りに元気に年齢を重ねてもらって町に活気を取り戻そうと、3年前に兵庫県立淡路景観園芸学校に入学する職員を募集。2002年9月から1年間、農政商工部と保健福祉部の職員3人が同校で学び、兵庫県から園芸療法士として認定された。

2004年5月から、農政商工部の加藤ゆきみさん(30)らは、熊野市とその周辺自治体で介護が必要な高齢者11人の自宅を1週間に1、2回ずつ訪問し始めた。

同県紀宝町の元トラック運転手小西一也さん(76)は十数年前に脳出血で倒れて右半身が不自由に。隣町の保健センターでリハビリに励んでいたが、歩行が困難になり、リハビリにも行かなくなった。

初めは「花には興味ない」と消極的だったが、何度か通ううちに加藤さんが訪ねる時間には、庭に出て待っているようになった。シユロの葉で作るハエたたきを加藤さんに教えることもあった。昨年秋季には、前の週に植えたパンジ

園芸療法

三重県が導入 要介護者を訪問

も知らない間に肥料を施し、加藤さんを驚かせた。かつて京都の旅館で仲居をしていたパーキンソン症候群の女性(83)は独り暮らし。手

足の震えが止まらず、「何もよつしません」の一点張り。加藤さんが花の世話をしているのを見ていただけだったが、次第に「芽が出た」「つぼみがついたよ」と、訪ねるたびに教えるようになった。また、なかなか前向きな気持ちにはなれないようだが、冗談が出るようになったという。保健福祉部の西村美哉さんが担当している女性(83)は、園芸を始めたおかげで腰が軽くなった。えさを皿に入れたり、戸を開けて家の中に入れたり、猫の世話も積極的にするようになった。

加藤さんらは6か月間のプログラムの前後に高齢者の体のバランスを測定。数値を分析中という。

園芸療法に詳しい東京農業大農学部教授の松尾英輔さんは「高齢者施設で集団で園芸療法を行い、効果が得られることもあるが、住み慣れた自宅でリラックスしながら、一対一でお年寄りと同じ向き合えば、その人にとって必要な課題を見いだしやすい。人手不足という問題もあるが、理想的なかわり方といえるのは」と話している。

小西さん(右)とレタスの収穫をする加藤さん(左) フラタにしようか」と金詰も弾



庭先で育つ高齢者の元気

平成17年3月23日水
読売新聞(朝)夕版
17頁 くらし